

太宰治「走れメロス」の原話をたどって

In Search of the Original Story of Dazai's "Run, Meros!"

滝口晴生

Haruo TAKIGUCHI

太宰治の「走れメロス」は教科書にも載っており、太宰の短編としては最も有名なもののひとつであろう。またシチリア島「シラクス」(シラクサー)を舞台にしたものであることから、その話が西洋の話の原型にして太宰がひとつの心理劇に仕上げたものであることは容易に想像が付くだろう。物語としては単純なもので、要はメロスの心理的葛藤が主題となっている。

物語の展開とは別に違和感を感じるのは、人物の名前である。主人公の名「メロス」はギリシア風であるが、その友人である「セリヌンティウス」は、ラテン名である。特に西洋文学を研究してきたものにとって、このギリシア語とラテン語の矛盾は非常に気になるところなのである。太宰は物語の展開に興味があったので、人物名の齟齬には気づかなかったのかもしれないが、この名前が太宰の創作でないとするならば、まずその名前の出所を探ってみなければならぬ。太宰自身は作品の最後で「古伝説とシルレルの詩から」としているので、この名前がシラーの詩に依っていることは容易に知られる。とりあえずシラーの詩を見てみることにしよう。

太宰が読んだと思われるシラーの原詩については角田旅人「「走れメロス」の材源考」に「人質譚詩」というタイトルで採録されているのでそこから引用する。

暴君ディオニスのところに／メロスは短剣をふところにして忍びよつた

警吏は彼を捕縛した／「この短剣でなにをすつつもりか？言へ！」／険悪な顔をして暴君は問ひつめた／「町を暴君の手から救ふのだ！」／「磔になつてから後悔するな」－／「私は」と彼は言った「死ぬ覚悟でゐる／命乞ひなぞは決してしない／ただ情けをかけたいつもりなら／

三日間の日限をあたへてほしい／妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ／その代り友達を人質として置いてをこう／私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」(1-14行)¹

殺意から捕縛、処刑へと激急の展開で、人質の話の設定が語られる。シラーの詩を一読して驚くことは、このように最初にメロス(Moeros)という名前が出てくるのであるが、その友人の名は詩の中には一向に出てこないことである。「さつそくに彼は友達を訪ねた」(22行)、「無言のままで友を親友は抱きしめた」(29行)、「友達は私のために死ぬのです」(56行)「不憫だが、友達のためだ！」(75行)、「愛する友は私のために死なねばならぬのか？」(84行)「お戻りください！もうお友達をお助けになることは出来ません」(106行)というように一度として実名は出てこない。メロスの家僕でさえ、フィロストラトスという名前が与えられているのに、である。重要人物であるはずの身代わりの友人の名は単に「友」あるいは「友達」としか呼ばれていないのである。ではいったいセリヌンティウスという名はどこにあるのか。これは詩の中ではなく、詩集の巻末注解に出てくる。

この詩はイタリーの伝説中に材料をとつてゐる。ディオニスとはシラーの変へた名で、本名はディオニジウス Dionysius。イタリーのシシリー島の東海岸にあるシラクス Syrakus の支配者で、紀元前四〇〇年頃の人物。「友達」とは、伝説ではセリヌンティウス Selinuntius といふ名の男。(角田136)

これはいったいどういうことであろうか。シラーはこの物語を詩にするに当たって二人の友人の名の一方しか挙げなかったという極めて奇妙な状況が生じている。シラーは詩の材源をヒュギーヌス(Hyginus)に拠ったといわれている。そこにはセリヌンティウスという名が見えるので、ヒュギーヌス

をそのまま借用すれば何の造作もなくメロスとセリヌンティウスという名前を使ったはずである。しかし、シラーはそうはしなかった。なぜか。

シラーは後の豪華版でこの詩を載せるに当たってタイトルを *Damon und Pythias* に改めている。この「ダモンとピシアス」というのが、一般に伝わってきた名前なのである。ということは、シラー自身も「メロス」と「セリヌンティウス」という名に違和感を覚えたのではないだろうか。シラーが典拠としたヒュギーヌスの『寓話』(*Fabulae*) というのはいったいどのような書物なのであろうか。この書物について詳しくみるまえに、そもそもこの話の伝承の経緯を簡単にたどっておこう。

この説話に言及している文書と該当部分を翻訳しながら年代を追って挙げる。

1 ディオドロス・シケロス (Diodorus of sicily) 『世界史断片』(紀元前一世紀)

彼らが友人に献身的であることを示すのは単にお金を与えることばかりで無く、多大な危機の際にそれを共有することに表れている。たとえばディオニュシオスが僭主だったとき、フィンチアス(Phintias)というピタゴラス門徒が、僭主に対する陰謀を抱き、その罰を受けようとしたとき、身の回りのことを整理するために僭主に猶予を願った。そして自分の友人をその担保に差し出すと。僭主は、彼の代わりに牢獄につながれる友人などいるのかと疑ったが、フィンチアスは彼の知己の一人、ダモン(Damon)というピタゴラス派の哲学者を呼んだ。彼は躊躇なく、フィンチアスの死の担保として申し出た。友人に対するそのような偉大な愛に賛同する者もいれば、人質を向こう見ずで愚かだと非難する者もいた。処刑の時間、これらの人々は自分のかわりの担保を差し出した者が約束を守るのかどうか知りたくて、急いで集まってきた。処刑の時間が近づき、皆が希望を失い始め、ダモンが処刑へと引かれ、いよいよという時、予想を覆してフィンチアスが到着したのである。そのような友情はすべての人の目には奇跡の国のものに映った。ディオニュシオスは罰を許し、二人に自分自身を友情の三人目に加えるよう頼んだのである。(Fragments of Book X, iv)

2 キケロ (Cicero), 『義務論』*De Officiis* 3.44-45 紀元前一世紀

ピタゴラス門徒のダモンとフィンチアス(Damonem et Phintiam)はそのような理想的な友情を謳歌した。つまり、僭主ディオニュシオスが一方の処刑の日を定めた時、処刑が決まっていた彼は自分の愛する者を友人の手に任せるために数日の猶予を求めた。もう一人の方が戻るための担保となった。もし戻らなければそのものは死刑に処せられるという条件で。処刑の日、友は戻り、僭主は彼らの信頼を賞賛し、三人目の友として自分を入れてくれるように頼んだ。²

3 ヴァレリウス・マクシムス (Valerius Maximus) 『著名言行録』(*Factorum ac Dictorum Memorabilia*) 1世紀

ダモンとピンシアスは強い友情で結ばれていたが、一方を僭主ディオニシウスが死に処すことを望んだとき、彼から死ぬ前に家のことを処理する猶予を願った。他方は戻ってくる保証として僭主に自分を差し出すことを躊躇しなかった。こうしてたった今頭の上に剣の刃がかかっていた者が死を逃れた。同時に、生きることができた者が自分の頭を差し出したのだ。皆は、とりわけディオニシウスは、この珍しくも危ういことの結末を見守った。約束の日が近づいたが、かの者は戻ってなく、そこで皆は保証となった者のその愚かさをひどく揶揄した。しかしこのものは友の誠実を疑うなど全くないと明言した。ディオニシウスによって定められていたまさにその時間に、約束を受け入れた者が、不意に到着した。二人の心持ちに賛嘆したディオニシウスは誠実さの故に罰を免じた。さらに彼は自分を友情関係に、同等の好意を育む(*mutua cultorum benevolentia*) 三人目の仲間として迎えてくれるよう懇願した。

4 ラクタンティウス (Lactantius) 『教理原論』(*The Divine Institutes*) 第5巻 3世紀

では友情のためでさえ死ぬのは愚かであるとあなたは考えますか。あのピタゴラス門徒の二人は何故にあなたがたに賞賛されているのですか。その一人はもう一人のために人質となって僭主に自分

を差し出し、その一人は決められた時刻に、つまり人質がまさに処刑されようとした時、出頭し、自分が割って入ることで彼を救ったのですが。彼らの徳は、一人が友人のために喜んで死のうとし、もう一人がまさに約束した言葉のために死のうとしたとき、愚か者だと見なされたら、決して輝かしい名声とはなっていないでしょう。要するにこの徳という点において、僭主は両者を赦すというほうびをあたえ、そうして残酷な男の性分が変わるということになったのです。さらには自分をもう一人の仲間に入れるように頼んだともいわれています。そこから彼が、彼らを愚か者ではなく、善良で賢明な者たちと見なしていることは明らかです。

5 ポルフェリオス (Porphyry) 『ピタゴラス伝』 (*Vita Pythagorae*) 3 世紀

ディオニシウスは、あるとき彼らのお互いへの忠誠心を試してみたいとおもった。そこで彼は一計を案じた。フィンチアスが捕らえられ、僭主の前に連れて行かれ、僭主に対する陰謀の罪を問われ、有罪とされ、死刑が下った。フィンチアスは状況を受け入れ、その日の残り時間を、自分と、彼の友人であり、共同生活者であるダモン (いまや彼が家政をとりしきらなければならないので) のことをかたづけるために、与えてくれるよう頼んだ。それゆえ、かれはダモンを彼が現れる担保として残して、一時的な釈放を求めた。ディオニシウスはその要求を認め、ダモンを召喚した。ダモンはフィンチアスが戻ってくるまで残ることを承諾した。聞いたこともないこの行為がディオニシウスを驚かせたが、最初にこの試みを提案した者は、ダモンは自分の命を失うことになる、と、彼を嘲笑した。しかし、皆が驚いたことに、日暮れ時近くフィンチアスが死ぬために戻ってきた。そこでディオニシウスは賞賛の声を挙げ、彼ら二人を抱き、自分を友情の三人目に受け入れてくれるよう頼んだ。彼は懇願したが、彼らは理由は言わず、これを拒絶した。アリストクセノスはこのことをディオニシウス自身から聞いたと言っている。(60-61)

6 イアンブリコス (Iamblicus) 『ピタゴラス派の生き方』 (*De Vita Pythagorica*) 4 世紀

シラクサの僭主ディオニシオスの取り巻きが、ピタゴラス門徒を傲慢だと批判し、彼らの沈着や忠誠や冷静さは、大きな恐怖が迫れば終わるのだという。それに異議を唱える者もいた。議論となり、そこで彼らを試すことが目論まれた。ディオニシウスがフィンチアスを召して、非難する者の一人が、フィンチアスが他の者とディオニシウスを亡き者にする計画を立てているのは明らかだと言っており、ほかのものたちも証言したので、非難は信憑性があると言った。フィンチアスはその言葉に驚いた。このことはよく調べられたので、このものを死刑に処さねばならないと断言した時、フィンチアスは、そうならねばならないと思われるのだとしても、自分とダモンの家のことを片付けられるように、日の残りを与えてくれるよう、ディオニシウスに要求した。というも二人は一緒に生活していて、すべてを共有しており、しかもフィンチアスが年上なので、家政の大部分は彼に任されていたからであった。そのことで解放することを要求し、そのかわりにダモンを担保に指定した。ディオニシウスは驚き、死の保証人になるために残るものがあるのかと尋ねた。フィンチアスはいるといっているので、ダモンが呼ばれることになった。ダモンは、事情を聞いて納得し、担保となってフィンチアスが戻ってくるまで彼の代わりに残ることに同意した。ディオニシウスはこのことに衝撃をうけたが、この試みを最初にもたらした者たちは、ダモンを犠牲になるものだとあざ笑い、犠牲の鹿の身代わりだとからかった。日がすでに暮れかけたとき、死すべきフィンチアスが戻っていた。皆は驚き、屈服した。ディオニシウスは二人を抱き、キスし、自分を彼らの友情の3人目に受け入れてくれるよう懇願した。ふたりは固辞したが、それでもディオニシウスはその提案を飲んでくれるよう固執した。このようにアリストクセノスはディオニシウスから聞いたと言う。

7 サー・トマス・エリオット (Sir Thomas Elyot) 『為政者という書』 (*The Book Named The Governor*) 1531、第2巻第11章³

2人のピタゴラス門徒、ピシアスとデイモンは、完璧な友情関係にあったので、一方がシシリア王

ディオニシアスに対して陰謀をたくらんだと訴えられたとき彼らはふたりとも捕らえられ王の元へ連れて行かれた。王はすぐさま訴えられた者を死刑にする判決を下した。しかし彼は死ぬ前に家に戻って家のことをちゃんと済ませ、物品を片付けることができるよう願った。それを聞いて、王は、笑いながら、戻ってくるといふどんな保証を残すのかとあざ笑いながら言った。その言葉を聞いて、彼の友が前に進み、友のために自分が担保として残ろうと言った。定められた時間に彼が戻らなかったら彼は喜んで自分の頭を失おうと言った。その条件を僭主は受け入れた。死すべきはずだった若者は家に戻ることを許され、そこで万事処理し、物品をうまく処分した。戻るよう定められた日がやって来、時は十分たった。それで王は保証となった者呼んだ。彼は少しも恐れられた様子を見せず、僭主の判決に身をゆだね、友の命を救うために死ぬことを少しもいとわなかった。しかし刑吏が布で彼の眼を覆い、頭を切り落とすために剣を抜いていた時、彼の朋友が走りながら、またまだ約束の日は過ぎていないと叫びながら、やってきた。そして彼は刑吏に、友を解きはなち、事の起こりとなった者を処刑する準備をするよう願った。それを聞き、僭主は大いに恥じ、二人を自分の前に連れて来るように命じ、彼らの高貴な精神と忠実な友情に驚きを表明して、多大な褒美を与えつつ、彼らの仲間に入れてくれるよう望んだのであった。

以上の中で、もっとも状況説明が詳しいのは、ポルフィリオスとほぼ同じであるが、イアンブリコスの記述である。彼が依拠したのは、ティマイオス(Timaios)の著作(すべて失われた)であるといわれ、後者はイタリアやシチリアの情報に詳しくたとされている(Burnet 86)。しかもダモンとピンチアスの話は、アリストクセノスが直接ディオニシオス2世から聞いたものとしている点、ティマイオスが信頼でき、それを忠実に伝えているとするならば、イアンブリコスの話をもっとも直接的な話であると考えられるであろう。二人がピタゴラス門徒で共同生活を送っており、担保となったのはダモンであり、ピンチアスはその日の夕方に戻ってきているという点は一致している。

ギリシア語文献はすべてダモンが担保となっているが、ラテン語文献では、どちらともいえない書き方になっている。また猶予を求めた理由も、キケロは「自分の愛する者を友人の手に任せる」ためというように曖昧か、述べられていない。

そうするとギリシア語文献で特徴的なのは、二人がピタゴラス門徒であり、しかも共同生活をしたということが重要であり、それが猶予を求める理由となる。そこにこの友情物語が生まれた鍵があるようにおもわれる。それを見逃せば、純粋な友情物語として語られることになるからであり、ラテン語文献にすでにその傾向が見えるのである。ラクタンティウスの言及は、物語の展開とは関係がないが、この友情物語が稀有なものであることを利用して、キリスト教徒の弁護を試みているのである。

さてこれらの文献の記述とヒュギーヌスの『寓話』の記述と比べてみる。詳細にみるため、ラテン語原文と訳文を挙げる。第257章「友情でお互い同士結ばれた者」(Qui inter se amicitia iunctissimi fuerunt)というタイトルの章にメロスは出現する。

In Sicilia Dionysius tyrannus crudelissimus cum esset suosque cives cruciatibus interficeret, Moeros tyrannum voluit interficere. quem satellites cum deprehendissent armatum, ad regem perduxerunt. qui interrogatus respondit se regem voluisse interficere. quem rex iussit crucifigi. a quo Moerus petit tridui commeatum ut sororem suam nuptui collocaret et daret tyranno Selinuntium amicum suum et sodalem qui sponderet eum tertio die venturum. cui rex indulset commeatum ad sororem collocandam, dicitque rex Selinuntio, ut nisi ad diem Moerus veniret eum eandem poenam passurum, et dimitti Moerum. Qui collocata sorore cum reverteretur, repente tempestate et pluvia orta flumen ita increvit ut nec transiri nec transnari posset. ad cuius ripam Moerus consedit et flere coepit ne amicus pro se periret. Phalaris autem Selinuntium cruci figi cum iuberet ideo, quod horae sex tertii iam diei essent nec veniret Moerus, cui Selinuntius respondit diem adhuc non praeteriisse. cumque iam et horae novem essent, rex iubet duci Selinuntium in crucem. qui cum duceretur

vix tandem Moerus liberato flumine consequitur carnificem exclamatque a longe: sustine carnifex, adsum quem spondit. quod factum regi nunciatur. Quos rex ad se iussit perducī rogavitque eos ut se in amicitiam recipere, vitamque Moero concessit.⁴

シチリアで僭主ディオニシオスは、ひどく残酷で、その市民を拷問にかけては殺していた時、モエロスはこの独裁者を殺害しようとおもった。護衛兵が武装した彼を捕えると、王 (regem) のもとに連行した。彼は尋問されて、王を殺すつもりだったと答えた。王は彼を十字架につけるよう命じた。モエルスは、王に、妹を結婚させることができるよう、また自分が三日目に戻ってくることを保証する友人であり同志でもあるセリヌンティウスを提供しましょうと言って三日間の猶予を願った。王は彼に、妹のことを片付けるための猶予を認め、セリヌンティウスには、もし期限日にモエルスが帰らなければ、彼が同じ罰を受け、モエルスは放免されると言う。⁵ 彼は妹を片付けて戻ってくる時、突然嵐と雨が起こって、川が増水し、渡ることも泳いでわたることもできなかった。彼は岸のそばで座って自分のために友が死んでしまうと泣き始めた。一方暴君 (ファラリス) は、セリヌンティウスを十字架に架けるように命じた。すでに三日目の六時になっていて、モエロスが帰ってこないからであった。セリヌンティウスは王に、日はまだ過ぎていませんと答えた。すでに9時となったとき、王はセリヌンティウスを十字架へ連れて行くよう命じた。彼が連れて行かれるか行かれないかというとき、モエルスが、やっと川を逃れて、執行人を追って遠くから叫んだ。「執行人よ、まってくれ、彼が保証人となったものはここにいる」と。起こったことが王に告げられる。王は彼らを自分のところに呼び寄せ、友情の中に自分を受け入れてくれるよう懇願し、モエルスの命を赦した。⁶

ヒュギーヌスの記述が、他の資料と異なる点は、1) 「モエルス (モエロス)」と「セリヌンティウス」という他の資料ではまったく現れていない名前になっていること、2) 処刑の方法が十字架刑であること、3) 猶予を求める理由が、妹を嫁がせるという家族的なものであること、4) 婚礼後の帰途の困難の記述があることである。しかし、セリヌンティウスが「仲間」(sodalis) であると語っているように、ピタゴラス門徒であることの痕跡を伺わせてもいる。とはいえ、モエルスの言葉そのものも引用され、物語は大変ドラマチックなものとなっていて、その意味で、よりフィクション的であるといえるだろう。

ではこの話を記録したヒュギーヌスとはどういう人物なのであろうか。最新の『西洋古典学事典』によれば、

ガイウス・ユリウス・ヒュギーヌス (Gaius Julius Hyginus)

(前64頃一後17頃) ローマ帝政初期の学者。ヒスパニアの出身、あるいは若い頃カエサルによってローマに連れて来られたアレクサンドレイアの人。アウグストゥス帝の解放奴隷。詩人オウィディウスの親友。皇帝によってパラティウムの図書館の司書に任ぜられる。博識で歴史、宗教、農業、伝記、考証学に関する書物の他、ウェルギリウスの注釈書など広範囲にわたる多数の作品を著わしたが、わずかな引用断片を除いてすべて失われた。

名前からしてギリシア系と思われるが、1世紀始めの人物であり、ヴァレリウス・マクシムスよりやや早い時代に生きたことになる。ロウズ (Rose) によれば、このように博学で、ラテン語、ギリシア語の知識があった人物なのであるから、「ヒュギーヌスという名前を冠している、系譜あるいは寓話 (Genealogiae or Fabulae) というタイトルの小さな書物」を書いた「両アントニウス時代の似非学者 (scolist)」とみなすわけにはいかないだろうという (445-6)。この点についても、『西洋古典学事典』は次のようにいう。

彼の名のもとにギリシア・ローマ神話伝説に関する次の2作が伝存するが、いずれもローマ帝政中・後期2～4世紀)の別人の手になったものと見なされている (ただし両書とも同一人物 Hyginus Mythographus の著作)。

つまり「神話学者ヒュギーヌス」という名前が冠されているのであるが、名前の付け方からして偽名を思わせる。また単一の人物ではなく、複数の人物が書き加えていった可能性が高い。そのような著作なので、記述の信頼性が疑われるのである。この物語の部分の記述においても、ディオニュシオスが、途中でパラリス(Phalaris)という名に変わっている(次の章は実際パラリスのエピソードである)。また原文のラテン語を見ると、メロスの名は最初 Moeros とあり、その後 Moerus になっている。これは印刷者の間違いである可能性もあるが、そのような軽微な間違いも散見される。

さて問題は、この物語の登場人物をモエルスとセリヌンティウスにしたのは、いかなる根拠かということになるが、そのような眼でこの書物を見たとき、友情物語に出てくるこの名前そのものに疑問が生じてくるのは当然といえるであろう。この書物ができたのが2世紀とはいえ、その前のキケロもダモンとピンシアスという名を用いているのである。それが、いきなりメロスとセリヌンティウスに変わっている。そうするとそのような突然の名前の変化は、まったく新たに創作したか、何か別の話に出てきた名前と取り違えたかである。前者はそもそも記憶されるべき伝説や事実を伝える書物であるので、創作は考えられない。残るは後者の取り違えである。

おもしろいことにフィンチアスとダモンの名前は、『寓話』にも出てくるのである。それは友情の章ではなく、「もっとも孝行な娘と息子」(Quae piissimae fuerunt et piissimi)と題された第254章である。

In Sicilia cum Aetna mons primum ardere coepit Damon matrem suam ex igne rapuit, item Phintia patrem.

シチリアでエトナ山が最初に噴火し始めたとき、ダモンは自分の母親を火から引っ張り出した。同じようにフィンチアは父を。

この話が同じ「シチリアで」(In Sicilia)ではじまることもあって、取り違えが生じたように思われる。そうすると、この火山の火から救い出した孝行息子(娘?)は別の名前だったかもしれない。ところでここはフィンチアスではなく、フィンチアとなっているのも妙である。女性名が普通であるが、男性名とも考えられる。しかしながら、この話はモエロスとセリヌンティオスという名の孝行息子(娘)の話ではなく、アンフィノモス(Amphinomos)とアナピス(Anapis)という兄弟の名で知られた逸話なのである。⁷ そうすると、友情物語の方が、アンフィノモスとアナピスの名で語られていないので、二つの話の登場人物が単純に入れ替わったのではないことになる。モエロスという名がどこから来たのかまったくの謎であるが、セリヌンティウスという名は、実は人物名ではなく、シチリアのセリヌース(Selinous)の人という意味である。イアンブリコスも、『ピタゴラス派の生活』の中で、各地のピタゴラス門徒の名前を挙げていてその中に、セリヌンティウス、つまり「セリヌースの人」という意味でこの言葉を使っている。しかもダモンとフィンチアスの名前とほぼ同じ箇所にある。原文ギリシア語であるがラテン語訳を示す。

Calais, Selinuntius. Syracusani, Leptines, Phintias, Damon. (Chap. 36)

セリヌース人では、カライス。シラクサ人は、レプチネス、フィンチアス、ダモン。

おそらく、文献上、「セリヌンティウス」という言葉と、フィンチアスとダモンの名が最も接近している例であると思われる。『寓話』がヒュギーヌスの著作ではなく、また最終的な形が4世紀にできあがったのであれば、ギリシア語の知識に欠陥がある人物が、この部分を読み誤った可能性も否定できない。とはいえ、モエルスの名の出自はやはり謎のまま残る。

『寓話』から、シラーと太宰は、稀有な信頼の物語を紡ぎ出したのであるが、イアンブリコスの記述にあるように、これはピタゴラス門徒の話だと考えれば、二人の稀有なる友情と言うよりも、ピタゴラス教団ともいべきグループの結びつきの強さを物語っていると言えるであろう。フィンチアスとダモンは共同生活を送っていた。フィンチアスの方が年上で、いわば家の主人である。だから、残るダモンのためにも自分が家政をかたづけておかなければならなかったのである。そして、ダモンは、当然のこ

とながら、フィンチアスが家政を処理すれば、戻ってくると考えていたに違いない。それは、宗教集団的な信頼関係である。そうでなければ、フィンチアスがダモンを担保に差し出すという発想も、ダモンがすぐさま承知することもあり得ないであろう。彼らの生活習慣の中では、このことはしごく自然に考えられたに違いないのである。フィンチアスはよもや自分が戻らないとも、ダモンはフィンチアスが戻らないとも、決して考えなかったに違いない。そのような教団員のみが理解しうる信頼関係なのである。したがって、ディオニシウスが、3人目に加えてくれといっても、ディオニシウスが教団員でない以上、二人が同意するはずがないのである。

しかし、これでは、非常に特殊な人たちの話となり、感動的な友情物語とはなりえない。ピタゴラス門徒の部分を取捨することによって、物語がはじめて人間的なものになる。シラーや太宰はそのような物語にしたといえるであろう。人間的という点においては、擬ヒュギーヌスは、嵐の記述などの導入によって、人間物語にした最初の作家といえるかもしれない。そこを原点として、太宰は、帰途中のメロスの葛藤、セリヌティウスの疑いというはなはだ人間的な心理物語にしたのである。しかしながら、もっと人間的な物語を考えるならば、リチャード・エドワーズ (Richard Edwards, ?1523-66) の『デモンとピシアス』 (*Damon and Pithias*, 1571) を挙げておかなければならないだろう。

これは16世紀の劇であるが、この物語の盲点を人間的に解決してくれるものである。盲点とは、友人を担保に差し出すというのも、普通では考えられない発想であるが、担保になるように頼まれたものが、それに同意することのほうがさらに考えられないだろう。それは、たとえば息子が、母親に担保になってくれるように頼むという、家族同士であればありうるだろう。しかし他人においてこのような頼みが成立するだろうか。もちろんそれが成立したと考えられたので賛美伝承されたのである。しかし、前に述べたように単に友情としてそれが成立したというのは誤解であり、ピタゴラス門徒だから成立したのである。つまり、本来それは単なる友情物語ではなかったのであるが、ピタゴラス門徒という背景が見えないと、奇跡的な友情物語となるのである。人間の心理を考えると、しかし、その奇跡は、太宰の場合で言えば、メロスのほうにあるというよりも、担保になることを承諾したセリヌティウスの方にあるといえないだろうか。そもそも彼が承諾しなければ、この物語は成立しないのである。しかし、セリヌティウスがその頼みを承諾するひとつの心理的要因が考えられる。それをエドワーズはこの物語の解釈として劇にしたのである。ところでエドワーズのバージョンでは、ダモンのほうが処刑される方で、担保となるのはピシアスである。ピシアスが年上である点は同じである。

まず宮廷にいた一人物アリスチッパスの言葉を聞いてみよう。

聞いたことがないことが今あのデモンによって宮廷で引き起こされている。／デモンは釈放され、ピシアスが牢獄にいる。／明日がその日で、もしデモンが戻らなければ／王はピシアスが死ぬことを宣言する。／そのことをピシアスはこっそり聞いて／友のために自分の命が支払われるまでに、デモンが戻ってこないことを祈っている。／自分の友のためにこんなにも喜んで死のうとするものがあるなんて／聞いたことがあるだろうか。／ああ高貴な友情よ、完璧な兄弟愛よ、／お前の力がここに示される、しかも完璧に。(1029-40)

アリスチッパスは、ピシアスの方が犠牲になることを覚悟していることを述べる。友を信じるピシアスに対してディオニシウスは、「真の友だって？誓いを破る偽りの裏切り者だ。お前が厭でないとしても、お前は命を失うのだ」(1546-7)という。それに対して、ピシアスは、次のように答える。

私は自分が言ったことを行うことにやぶさかではありませんし／死に瀕して心乱れてもいません。／神々は私の切なる祈りを聞かれたし、／この大いなる名誉へと私を定められたことを、／つまり友のために死ぬことをわかっています、その友の信義を今も信じていますが。／友デモンは決して裏切り者ではなく、／でも神ならぬ身なので、自分ができるだけのことにはしているはずで、／風が邪魔しているかもしれないし、病気や途中の事故が気力を失わせているかもしれませんが／それ

らのことは神々がすべてを私の栄光へと向けておられるのです・・・／ピシアスはデイモンのために死んだという名声が響き渡るように、／彼が戻らないように、すべての神々に祈りました。／今嬉しいことに私の願いを聞き届けてくださいます／私は何をぐずぐずしているのでしょうか、一人の者の死が／王よ、あなたの怒りを鎮めるのに十分なことがわかっていますのに。(1548-64)

年上であるピシアスは、自らを犠牲にして若い友を救おうとしたのである。エドワーズは、この友情物語のもう一方の側一つまり、太宰の物語で言えば、セリヌティウスの側に光を当てたと言えるのである。

太宰は「古伝説」にも言及しており、それが高等小学校の教科書の「真の知己」を意味しているとすると、⁸「ダモン」と「ピチウス」という名は知っていたはずであるが、⁸あえて彼は「メロス」という名を選んだ。その名の持つ響きが魅力的であったのであろう。「走れ、メロス」であって「走れ、ピチウス」では、ピンと来ないと言えるだろう。擬ヒュギーヌスのけがの功名というべきか。

注

¹ 小栗孝則訳『新編シラー詩抄』(昭和12年)。角田旅人「走れメロス」材源考。山内祥史編『太宰治「走れメロス」作品論集』。東京：クレス出版、2001年：122-44。

² キケロ、『トウスクルム談論』*Tusculanae Disputationes*, 5.22でもほぼ同じことが述べられており、比べてディオニュシオスの不幸が強調される。

³ この話の資料を時代的に跡付けた杉田英明「〈走れメロス〉の伝承と地中海・中東世界」では、1～4および7について言及され、和訳も提供されている(山内祥史編『太宰治「走れメロス」作品論集』、東京、クレス出版、2001、288-379)。ヒュギーヌス以後は、杉田の関心はアラブ中東世界に移るので、英語文献への言及はない。

⁴ *Auctores Mythographi Latini*, ed. Augustinus van Staveren, Leyden, 1741 (Google Books). この版は、ヒュギーヌスのものとされる著作も含めて複数の神話集積文献が集められ、なおかつ詳細な注釈がついている。

⁵ *dimitti* は *dimittit* に訂正する (Staveren 366, n.6)。そのほうが、*dimittit* は直説法なので、そのまえの *dicit* (言う) と同じ時制となり、「モエロスを放免する」という地の文となり文法的には一貫する。

⁶ 杉田英明「〈走れメロス〉の伝承と地中海・中東世界」(『太宰治「走れメロス」作品論集』)

⁷ Staveren 363, n. 13.

⁸ 小野正文「「走れメロス」の素材について」(山内祥史編『太宰治「走れメロス」作品論集』)、57-58。

引用文献

Burnet, John. *Early Greek Philosophy*. London: Adam & Charles Black, 1930. Print.

Cicero. *De Officiis*. Trans. Walter Miller. Loeb Classical Library. London: Heinemann, 1975. Print.

_____. *Tusculan Disputations*. Trans. J. E. King. Loeb Classical Library. London: Heinemann, 1950. Print.

Diodorus of Sicily. With English trans. C. H. Oldfather. Vol. 4. Loeb Classical Library. London: Heinemann, 1961. Print.

Elyot, Thomas. *The Book named The Governor*. Everyman's ed. 1962. Print.

Lactantius. *The Divine Institutes*. Web.

Rose, J. H. *A Handbook of Latin Literature from the Earliest Times to the Death of St. Augustine*. London: Methuen, 1966. Print.

Staveren, Augustinus van, ed. *Auctores Mythographi Latini*. Lugduni Batavorum (Leyden), 1741. Google Books. Web.

Valerius Maximus. *Factorum et Dictorum Memorabilium*. The Latin Library. Web.

White, D. Jerry. *Richard Edward's Damon and Pithias: A Critical Old-Spelling Edition*. New York and London: Garland, 1980. Print.

松原國師『西洋古典学事典』京都、京都大学学術出版会、2010。

山内祥史編『太宰治「走れメロス」作品論集』東京、クレス出版、2001。